

<実践報告・調査報告>

京都産業大学ギャラリーの実践報告 —博物館学芸員課程との関わりを中心に—

吉田 卓爾¹・川上 由里絵²・川上 万尋²・内藤 唯²

京都産業大学の壬生校地にある「むすびわざ館」にはギャラリーが設置されており、本組織に所属する学芸員は企画展での資料の公開を中心として、調査研究活動に従事している。他方、ギャラリーの使命は外部への発信ばかりではない。結集した知恵を次代の人材育成のために役立てることこそ、大学教育の場に存在する同組織の至上命題である。ギャラリーは開館当初より、本学文化学部が運営する学芸員課程と連携し、「博物館実習」の授業への協力や館園実習の受入れを行っている。また、学芸員資格の取得を目指す学生が実践的に諸々の知識や技能について学び得る場となるべく、環境の整備にも継続的に取り組んできた。過去にはギャラリーによる臨地調査に際して、関係各所の許可を得て「博物館実習」の履修者を同行したこともある。本稿では、ギャラリーの概要と活動、学芸員課程と連携した教育実践の具体例、大学教育において求められる役割や今後の課題について報告する。

キーワード：大学教育、学芸員課程、博物館実習、地域連携、小山家

1. はじめに

京都産業大学の壬生校地にある「むすびわざ館」に設置されたギャラリーは、単に展示室としての役割のみを担っている訳ではない。本稿ではギャラリーと本学学芸員課程とが連携した教育実践の概要を報告し、ギャラリーの活動や役割、とりわけ学芸員課程の教育活動におけるギャラリーの存在意義について記すこととする。

2. 京都産業大学ギャラリーの使命

ギャラリーには、大学博物館としての役割と地域社会における博物館としての役割がある。本章ではギャラリーの概要、本学の学芸員課程への協力内容について報告する。また、学芸活動及び学芸員課程の授業において重要な位置を占める小山家資料についても簡潔に触れる。

2.1. 京都産業大学ギャラリーの概要

京都産業大学ギャラリーは平成24年(2012)5月に開館した。むすびわざ館というサテライトキャンパスの2階に位置し、京都市北区上賀茂のキャンパスからは離れているが、隣に附属中学校・高等学校が併設されている。

展示は主に企画展、特別展、常設展(所蔵品展/ミニ企画展)の3種類を行っている。平成30年(2018)11月30日までに企画展16本、特別展3本、常設展(所蔵品展/ミニ企画展)12本を開催した。また、3種類に含まれない展示としては、他館との合同展と、大学図書館との合同展を1本ずつ行っている。内容は様々であるが、歴史、文化、芸術、民俗、産業、自然科学に関する調査や取材を行い、その成果の発表や、独自に制作した映像資料を公開している。

所蔵している資料は大きく2つに分けられる。

1つは本学のコンピュータ教育を象徴する大型計算機「TOSBAC-3400」である。これは昭和42年(1967)に初代学長である荒木俊馬が購入したもので、当時の日本では最先端のコンピュータであった。このコンピュータの中央処理装置や磁気テープ、磁気ディスク装置などは年間を通して常設展示を行っている。

2つ目は京都下嵯峨の薪炭商・小山家が所蔵していた近世～近代にかけての商売に関する資料である。これらの所蔵品は、学芸員課程とともに調査を行い、常設展(所蔵品展)で成果の発表を行っている。

平成29年からは学芸員課程の4回生とともに展示の企画を行い、特別展を開催している。さら

¹ 京都産業大学 文化学部、² 京都産業大学 ギャラリー

に学芸員資格取得に必須である館園実習の実習生を受け入れ、資格取得の場ともなっている。

2.2. 小山家資料の調査と活用の経過

小山家は下嵯峨（京都市右京区）の地で薪炭商を営んできた商家である。

小山家の調査は鈴木久男氏（京都産業大学文化学部教授）による平成23年5月3日の聞き取り調査から始まった。調査の進展に伴って、商売に関わる貴重な文化財が継承されていることが判明した。以降、文化学部の演習の一環として調査が進められた。

平成23年度の秋からは京都産業大学ギャラリーの学芸員も調査に参加し、平成25年11月20日から平成26年1月18日にかけて「第6回企画展 京都下嵯峨薪炭商小山家の歴史」と題して展示会を開催した。商いに使用されていた秤や大福帳など29点を展示した。

また、博物館学芸員課程の実習として、小山家から寄贈を受けた資料の調査も実施している。その成果の一端を公開するために、平成26年12月にはミニ企画「屏風展」を開催し、実習の際に調査対象とした屏風3点を展示した。

その後も博物館学芸員課程との共同調査は継続して行われ、平成28年6月には〈琴棋書画図屏風〉（本山修験宗本山聖護院所蔵）の調査が実現した。これは小山家に伝わる〈西王母東王父屏風〉の研究を深めることを目的とした調査であった。〈西王母東王父屏風〉には画題、作者、製作年代等を知り得る資料は残されていない。そのため、構図に類似点が見られる〈琴棋書画図屏風〉の調査を行い、手掛かりを得ようというものであった。調査はギャラリーの学芸員を中心に行ったが、博物館実習Ⅰ・Ⅱの履修生も見学実習として調査に参加した。その調査成果を平成29年11月に特別展「嵯峨嵐山小山家の生活～京都産業大学学芸員課程の歩み～」で紹介した。

平成30年9月には明治150年京都創生の一環として「大政奉還前夜～小山家資料から見る幕末～」を開催し、安政2年（1855）の「火事装束」を中心に小山家に伝わった江戸末期から明治期にかけての資料を展示した。

2.3. 博物館学芸員課程との連携

ここではギャラリーから見た博物館学芸員課程との関わり方を紹介する。

博物館学芸員の資格取得には登録博物館または博物館相当施設において実習を行う必要がある。当館は平成27年に博物館相当施設の資格を取得

し、以来館園実習の受け入れを行っている。受け入れの人数は原則4名までとし、平成28年度は1名、平成29年度は4名、平成30年度は2名の実習生を受け入れた。5日ないしは6日の実習期間で資料の取扱いや展示作業、展示の企画や立案など学芸業務全般を体験できるような内容で実習を行っている。

平成29年度からはギャラリーと博物館学芸員課程の合同で展示を行う取り組みを始めた。きっかけとなったのは先述した平成28年6月の本山修験宗本山聖護院の屏風調査である。博物館実習Ⅰ・Ⅱの履修生たちは事前学習でギャラリー所蔵の屏風の取扱いを学び、実際に調査に参加し、そして事後学習で見学実習のレポートを作成した。

平成29年11月の特別展「嵯峨嵐山小山家の生活～京都産業大学学芸員課程の歩み～」で〈西王母東王父屏風〉を展示するにあたり、調査に参加した博物館実習Ⅱの履修生たちを中心に「屏風の展示をより分かりやすいものとする工夫を考える」といった課題を与えた。

履修生たちはA・Bの2班に分かれ、A班は聖護院での調査や、展示室内の工夫（動線・ライティング・配置のバランスなど）を紹介した配布資料の作成を行った。B班は展示の補助資料の作成を行い、屏風に使用されている岩絵具の紹介・考察や、クイズなどを展示室に配置した。また、屏風自体が現代では馴染みがないものとなっているため、「屏風講座～入門編～」と題した人形劇風の映像資料を作成し、屏風に関する理解を深めてもらうよう努めた。映像に関しては学芸員による提案・構成ではあったが、人形や声の演出は全て学生が行った。来館者アンケートにも「続編を作ってほしい」という声がちらほらと見られ、好評であった（図1）。



図1. 特別展「嵯峨嵐山小山家の生活～京都産業大学学芸員課程の歩み～」の様子

また、屏風の展示を行う一方、本学の博物館学芸員課程が10年の節目を迎えたことを記念し、学生たちの活動や、ギャラリーとの関わりを紹介した。講演会には講師に博物館学芸員課程の担当教員を招き、小山家資料の紹介と、出展されていた屏風の解説が行われた。結果として展示は24日間で203名が来館した。

平成29年度の展示は博物館実習Ⅱの履修生が中心であったが、同時に博物館実習Ⅰの履修生も合同授業といった形でⅡの授業に参加をさせた。その中でⅠの履修生に「平成30年度にギャラリーで合同展（学生展）を行う」ことを目標とした。平成29年度は学芸員が企画した展示にプラス要素を加えるだけであったが、平成30年度は一からテーマを考え、企画・調査等も全面的に学生が行うこととなった。あくまで主体は博物館学芸員課程の履修生であるが、授業には可能な限りギャラリーの学芸員が参加することとなった。

平成30年度の展示企画は平成29年10月14日の顔合わせからスタートした。授業の中でテーマを「コーヒー」にすることが決まった。これは京都府がコーヒーの消費量が日本一であることを受け、その理由を解明したいという学生の思いによるものであった。また、ギャラリーが本学から離れているため、京都産業大学に通う学生の中でギャラリーの存在が知られていないことに触れ、ターゲット層を大学生とすることが決まった。

平成30年4月14日からは博物館実習Ⅱの授業で合同展（学生展）に向けた準備を進めることとなった。平成29年度にⅠを履修していた学生10名の他に、平成30年にⅠとⅡとを同時に履修している4年生12名が加わり、総勢22名となった。同時履修の12名は既にテーマが決定してからの参加であったが、コーヒーの展示を行うことに対して疑問や異論は出なかった。それ以降の展示では4班に分かれ、コーヒーの歴史や京都の老舗喫茶店の調査、研究、映像資料の作成を行った。現時点（平成30年11月）では、それぞれの班が資料借用や解説文の作成に追われ、まだ展示の全貌は見えていない。展示が終わっていない段階なのでまだ成功とも失敗とも言えないが、学びの場であるギャラリーを学生に全面的に活用してもらい、本学学生の調査・研究成果を一般に公開する機会を得たという点においては、合同展を行うことは成功と言えるだろう。

また、平成30年度はギャラリーの学芸員が、文化学部の鈴木久男（客員教授）と吉田卓爾（非常勤講師）が担当する授業に、ゲストとして講義を実施する機会を得た。「博物館展示論」ではギャラ

リーがかつて行ってきた展示の紹介や、それぞれの工夫点、改善点を紹介した。また、展示論履修生による模擬展示（文化学部事務室がある11号館1階の共有スペースで開催）へのアドバイスなども行った。「博物館資料論」ではギャラリーが所蔵する資料を紹介し、展示で借用した資料の実例を挙げながら、資料保存の一例を紹介した。学芸員による講義への協力も、本学の教育においてギャラリーが担う役割の一つと言えよう。

3. 学芸員課程におけるギャラリーの活用

本章では学芸員課程科目を担当する教員の側から、ギャラリーとの連携によって実現し得た授業の概要について報告する。

3.1. 本学学芸員課程の概要

本学の学芸員課程は、平成20年度（2008年4月）より発足・開講し、文化学部により運営されている。昨年度（2017年度）は十年目の節目を迎えた。これまでの学芸員課程における活動及び課題を総括し、発足当初の理念や基本方針を再確認する時期を迎えている。同時に、今日の博物館行政の在り方や学芸員を取り巻く状況を冷静かつ的確に見極め、時流を顧慮しつつも、長きに亘って揺らぐことのない博物館学分野の基本的な知識と基礎的な技能とを尊重しながら、文化都市京都という地域的な特色を反映させた京都産業大学独自の学芸員課程の今後を議論することも求められよう。本学の学芸員課程における課題については、機会があれば改めて触れるつもりである。本稿では本課程の運営において、〈ギャラリー〉が果たしてきた役割について述べておきたい。

3.2. ギャラリーを活用した授業の具体例

以下、吉田が担当した授業日程の中で、ギャラリーにて実施した授業の概略を記す。なお各授業はギャラリーに所属する学芸員の協力・支援・指導があって初めて実施し得たものであることを付言しておく。

【平成26年度（2014）】

〔科目：博物館実習Ⅱ〕

・5月24日（土）：出席者約15名（他教員管理）

作業場所：教室・展示室

内容：小山家伝来品（屏風）の調査実習

対象資料・数量：屏風・二件

概要：履修生を二班に分け、各班一件ずつの屏風を対象として作業を行った。最初に屏風の取扱いに関する注意点について考察しながら、教員及び

学芸員が基本的な取扱い方法を実演した。次に、作品に仮番号を付し、名称（画題）、形態、材質、寸法、損傷等の項目について調査に記録し、写真撮影を行った。調査終了後には各班の代表者が調査結果を発表し、全体で情報を共有した。

・6月6日（土）：出席者15名（他教員管理）

作業場所：教室・展示室

内容：小山家伝来資料の調査実習

対象資料・数量：屏風・二件

概要：同年5月24日と同様。展示室での調査実習終了後、調査資料の活用について議論し、展示・公開の方法について各班の代表者がプレゼンテーションを実施した。

【平成27年度（2015）】

〔科目：博物館実習Ⅱ〕

・5月31日（土）：出席者約15名（他教員管理）

作業場所：教室・展示室

内容：小山家伝来資料の調査実習

対象資料・数量：掛け軸・三件（四点）

概要：履修生を二班に分け、掛け軸の取扱いに関する基本事項について確認した後、調書の作成及び写真撮影を実施した。

【平成28年度（2016）】

〔科目：博物館実習Ⅱ〕

・6月4日（土）：出席者約10名（他教員管理）

作業場所：教室・展示室

内容：小山家伝来資料の調査実習

対象資料・数量：屏風・一件

概要：基本的な実習内容は平成26年度と同様。当年度は調査実習の一環として、聖護院での調査への履修生の同行を控えていた。履修生が追体験しながら聖護院での調査を見学できるよう、小山家伝来品の中から聖護院の屏風と寸法や形状が類似した屏風を選択した。

【平成29年度（2017）】

〔科目：博物館実習Ⅰa〕

・5月13日（土）：10名

作業場所：教室

内容：小山家伝来資料の調査実習

対象資料・数量：古文書・二箱

概要：古文書に関する基礎知識、古文書の調査方法、管理方法について確認した後、資料調査を実施した。具体的には、資料一点ごとに仮番号を入れた付箋を挟み、付箋に対応させて調書に仮番号を記し、史料名（外題）、形態、寸法、差出人、受取人等の基本項目を調書に記録した。また写真撮影も行った。

・10月14日（土）：10名、11月18日（土）：8名、12月2日（土）：10名

作業場所：教室・展示室

内容：展覧会の企画運営に関する準備・作業

・11月11日（土）：10名

作業場所：展示室

内容：美術品の展示実習（ヤマトロジスティクス）

〔科目：博物館実習Ⅰb〕

・5月6日（土）：9名、6月17日（土）：10名

作業場所：教室

内容：小山家文書の調査

・7月8日（土）：9名

作業場所：教室・展示室

内容：聖護院門跡での屏風の調査のための事前学習・準備

・11月11日（土）：10名

作業場所：展示室

内容：美術品の展示実習（ヤマトロジスティクス）

〔科目：博物館実習Ⅱ〕

・10月14日（土）：13名、11月18日（土）：13名、12月2日（土）：13名

作業場所：教室・展示室

内容：小山家展の一部展示の準備

3.3. ギャラリーの活用の利点

学芸員に求められる基礎知識及び基本技能について実践的に学べる環境を整備することが、学芸員課程科目「博物館実習」の大きな課題である。実践的な授業を実施する上で、ギャラリーの活用は不可欠である。以下、ギャラリー活用の利点を挙げる。

第一、ギャラリーの所蔵品である小山家資料の如く、生きた資料に触れる経験ができること。第二、収蔵庫やデータベース等、資料管理の現場を実見できること。第三、展示公開事業の実施を想定した本格的な展示空間において、資料を扱う経験ができること。第四、展覧会実施のために学芸員が仕事する環境を身近に感じ、多種多様な業務を臨機応変にこなさなければならない仕事の様子に慣れ親しむこと。

以上の諸点は、大学の教室では十分に経験し得ないものである。また、同様の内容での授業を実施したとしても、実際の現場と大学の教室とでは緊張感が異なるであろう。以上の通り、学芸員課程科目全般、特に「博物館実習」において、ギャラリーを活用した授業は不可欠なものとなっている。

4. 小山家資料の活用

先にも触れたように、かつて嵯峨嵐山で薪炭商

を経営していた旧商家の小山家には、古文書、絵画、民俗資料等が伝来し、現在はギャラリーの所蔵もしくは管理となっている。多種多様な資料群は学芸員課程における授業の幅を広げると同時に、より実践的な授業内容の構築に貢献してきた。本章では、代表的な小山家資料を挙げながら、授業における活用の意義について述べておく。

4.1. 小山家文書の概要と活用

小山家文書の概要については、既に平成6年(1994)に刊行された『史料 京都の歴史 14 右京区』の「北区関係文書解説」において述べられている(京都市 1994)。すなわち、田地屋敷地や金銭に関する売券・借用証書類等、家業である薪炭商に関わりのある史料が大半を占める。

他方、『史料 京都の歴史 14 右京区』に挙げられていない史料の中には、その歴史的価値や伝来過程を明確にし難く、学術的な研究対象としては除外され兼ねないものが多数存在する。しかしながら、このような活用が憚られる史料にこそ、小山家の内的な部分を知り得る重要な情報が含まれている。ここでは、特殊な史料群について簡潔に紹介しながら、博物館実習における小山家文書の活用について触れておきたい。

第一に「太閤豊臣秀吉公御葬式行列記」が挙げられる。本資料の詳細については次項で学芸員の内藤唯氏より報告がある。

第二に、各時期の小山家の生活空間について知り得るものとして、元文2年(1737)の「造作願ひかへ絵図」、安政2年(1855)の「普請願書之写」等が挙げられる。薪炭商の生活の一端や小山家に伝来する調度品の性格について知り得る史料として貴重である。

加えて、天龍寺及び鹿王院との関係を示す証書類が伝わることは先の「北区関係文書解説」において既に言及されているが、鹿王院文書の中には寛政4年(1792)の「差上申御領御境内山地之事」があり、差出人に「上木屋弥兵衛」、宛名に「鹿王院様／御役人中様」とある。今後は小山家文書という枠組みにとらわれず、天龍寺や鹿王院の側から小山家及び小山家伝来資料について考察する必要がある。

これまで、ギャラリーが保管する小山家文書は、平成29年度まで同館の学芸員を務めた木村大輔氏によって目録の作成をはじめとした保存管理事業がなされてきた。木村大輔氏の功績により同文書の一部は京都産業大学の所蔵品として管理されている。同事業は現在も継続中であり、学芸員の川上万尋氏、内藤唯氏を中心として整理・公開が

なされる予定であるが、史料数は膨大であり、学芸業務の中で小山家文書の調査研究を実施することには限界がある。

他方、多種多様な史料が含まれ、小山家に伝来する調度品との関連が想定される小山家文書は、博物館資料の多様さ、古文書の種類や取扱い、調書及び目録の作成方法、個別の特徴を有する個々の史資料との向き合い方等について、博物館実習の履修生が実践的に学ぶ上で、甚だ重要な位置を占めている。

4.2. 太閤豊臣秀吉公御葬式行列記

小山家には「太閤豊臣秀吉公御葬式行列記」(原文では「閤」に「閣」の字があてられている。本稿では、史料内容を優先し、「閤」を用いる。以降『行列記』)という資料が伝来している(図2)。小山家及び小山家伝来品については平成27年度より継続して調査報告を行っており、当報告の中で本学客員教授(当時は教授)の鈴木久男氏が小山家の概要についてまとめている。小山家当主に代々伝承されてきた沿革によると、伏見城築城時に豊臣秀吉より「御墨付」と「上木屋」の屋号を賜ったとされる。また元文2年(1737)の火事により「御墨付」を焼失したらしい。

秀吉と縁の深い小山家にとって『行列記』は単なる一史料ではあるまい。『行列記』と同じ内容を有する同種の史料は全国各地で少なくとも数点が確認されている。これらの秀吉葬送時の行列について記した種々の史料について、河内将芳氏は秀吉の没年よりも隔たりのある時期に成立したこと、また太閤記人気や秀吉遠忌との関連の中で成立した可能性を示唆している(河内 2006)。

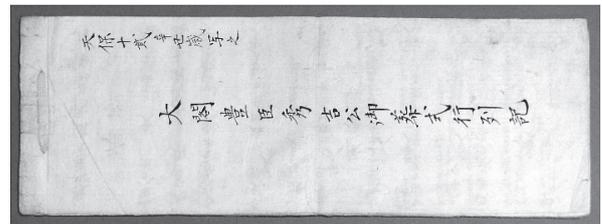


図2. 太閤豊臣秀吉公御葬式行列記 表紙

さて、ここで、簡単ではあるが『行列記』の紹介を行うこととする。

まず、『行列記』の表紙には「天保十貳年辛廿歳写之」とあり、天保12年(1842)に写されたものであることがわかる。さらに、奥書には「此御葬式一件列記ハ九条村之由緒アル農人之内ニ在て余に弥敷事故記之畢」、「上京第二區長乗西町住白井善四郎所蔵」とある。奥書を信用するならば、

天保12年に写されたものは元々「九条村之由緒アル農民」が所蔵していたことになる。ただし、先の河内氏の指摘を考慮すれば、奥書の内容自体が創作であるかもしれない。

仮に本資料を「九条村之由緒アル農人」が所蔵していたとするならば、その後、何らかの理由で上京第二区の長乗西町に住む白井善四郎氏の元へ伝来し、さらに資料が写されて小山家へ渡った、あるいは白井氏の所蔵していたものが小山家に入ったという伝来経過を想定し得る。

京都では、慶応4年(1868)、府が成立した後、明治5年(1872)に上京の町組である1-33番組が上京1-33区に改められた。明治12年(1879)に「上京区」と「下京区」が設置されたことに伴い、町組の「区」という名称は「組」に改称される。つまり、上京第2区という名称があったのは明治5年～12年の間であることがわかる。よって、この『行列図』が写されたのは明治5年以降であると推測される。小山家に渡った時期は記録が残されておらず、詳細は不明ではあるが、少なくとも明治5年以降のことである可能性が高い。

『行列記』の内容にうつる。『行列記』では、勅使に菊亭春季、導師は秀吉に重用されていた高野山の木食応其上人を迎え、政所や淀殿を始め武将等2万人以上が参列している。

行列は「山田八左衛門添人 高張五十添人／大高張 大高張十二張／宇都宮万吉添人 高張五十添人」から始まり、最後は「副使 廣幡大納言忠幸卿」で終わる(図3)。

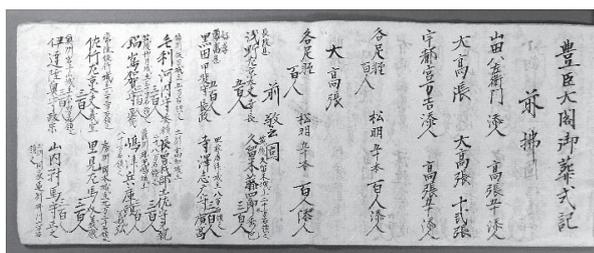


図3. 太閤豊臣秀吉公御葬式行列記 第一紙

その間は武将や僧侶、連歌師、医師等が参列しており、その様子が数ページにわたって記述されている。名前だけではなく、添え人の人数や、人物によっては簡単な紹介も添えられている。

例えば、政所について「左御供 大紋 三十人 素袍 五十人／政所殿 御附女中方 百人／右御供 大紋 三十人 素袍 五十人」とあり、政所には多くの御供が付いていたと記されている。

また、行列について述べた後は、秀吉の誕生や

享年、遺骸の在処、葬式の日時、見物客の様子等について記述している。

行列を見学していた民衆については「京都だけではなく近国から民衆が集まり、3日目には雨が降ったため大変混雑した」とあり、民衆にとっても秀吉の葬列は関心が高かったことを示している。

『行列記』によると、行列は伏見城を出発した後、大和大路北の大仏殿に到着したとある。その間の経路には「道の両側には提灯をすきまなく釣り、人家の軒には天幕、白砂を敷き、惣門から合龍堂までは畳を敷き詰めた」とあり、天下人の葬列に相応しい荘厳な準備の様子が読み取れる。

しかし、この『行列記』は写しということもあってか、武将の名や官位に誤りがあり、曖昧な記述が散見される。例えば、秀吉の家臣であった滝川忠征は豊前守であるが、『行列記』では「滝川豊後守」、真野頼包蔵人は「直野蔵人」等の誤りが見受けられる。また、直江兼続の場合は以下のような添え書きがある。「関東官領上中納言景勝卿陣代／豊臣家御大老之内 家老直江山城守兼継 三百人／奥州會津城主百二十七万石領之直江兼継者奥州二本松城主拾貳万石領之」。

これによると、豊臣家の大老、会津城主である直江兼続は上杉景勝の名代として参列、300人の添え人を連れていたとされている。しかし、実際には秀吉の大老、会津120万石の領主であったのは上杉景勝であるし、兼続自身が二本松城の城主になったことはなく、この添え書きの大部分は誤りといえる。

また、葬列の順番が他の行列記と前後していたり、葬列の様子等の記述も異なっている部分もあり、他の行列記との比較・考察は今後の課題といえるだろう。

4.3. 小山家における火災と火事装束

小山家は江戸時代に2度の火事に見舞われており、この火事が小山家資料、延いては小山家に大きな影響を与えた。重要資料の一つである火事装束の紹介の前に、小山家の歴史と火災との関わりについて触れておきたい。

小山家14代当主の小山弥兵衛(治三郎)氏と16代当主の勝之氏が昭和17年(1943)に著した『目録』には小山家の歴史がまとめられている。先にも触れたが、『目録』によれば秀吉から賜ったとされる「御墨付」は、元文2年(1737)の横町からの出火の際に、建物や家財と共に焼失してしまっただけである。さらに安政3年(1857)には小山家からの出火により、建物と家財のほとんど

が灰燼に帰した。直ちに焼亡した住居と、商いには欠かせない薪炭倉庫が再建されたが、再建にあたっては火元が小山家であったことから、住まいは華美にはしなかったと伝わる。

余談であるが、16代当主の勝之氏の話によると、下嵯峨近隣では竈やマッチの火が灯らない時に「上木屋さん、上木屋さん」と唱える風習があったそうである。これは安政3年の火事にあやかって（揶揄しているとも）のことで、当時の火事のように大きく燃えさかるようにという思いが込められているようだ。この風習は少なくとも昭和時代まで続けられたと伝わる。

さて、火事装束として一般に知られているのは火消し衆の半纏であるが、小山家のものは武士が使用していたものと類似している。実際に消火活動を行っていた火消し衆に対し、武家では日ごろから火事の警備を行っていた。その時に着用されていたのが火事羽織や胸当て、野袴からなる火事装束であった。

小山家の火事装束は「安政三年」と書かれた箱に納められていた。このことから2度目の火災（安政2年）を免れた資料であるとわかる。箱には羽織2点、胸当3点、宛帯2点、野袴1点、足袋一対が納められていたが、残念ながら頭部用の防具である陣笠や頭巾が欠けている。使用の形跡がほとんど見られないこと、16代当主の勝之氏が長年存在を知らなかったことを鑑みると、おそらくほぼ未使用のものであると言える。ただし、野袴の生地が劣化が進んでおり、保存・管理方法の検討が目下の急務である。

羽織・胸当て・宛帯には小山家の紋である梅鉢紋があしらわれている。胸当てに関しては3点中2点が同デザインで素材違いであり、夏用と冬用で使い分けていたとみられる。宛帯も同デザイン・素材違いであることから、こちらも胸当て同様の使い分けを行っていたものであろう。羽織はデザイン・大きさともに異なるが、1点はかなり厚手の生地で作られており、冬用であったか、もしくは消火活動の際に水を含ませて使用することを想定したのかもしれない（図4）。

足袋は革製のものが一対残されており、通常の布製の足袋とは異なり、火の粉を被った際も暑さを感じないよう考慮されている。

頭部用の防具が欠けていると記したが、火事装束が見つかった蔵から3点の陣笠が見つかっており、火事装束との関係性を調査している。それぞれ菊、鯛、斑点（水玉）が描かれており、一般的な陣笠と比べるとサイズは小さい。

こういった武士が着用するような火事装束が、



図4. 火事装束（小山家旧蔵）

なぜ小山家に伝来したのかは定かではない。しかし下嵯峨村の役人として指導者的立場にあった経緯から、もしもの時に備えていたと考えられる。

5. 地域社会におけるギャラリーの役割

これまでギャラリーが蓄積してきた学芸活動の一部は、地域社会における博物館としての役割を果たす活動の中に位置づけられる。すなわち、本学ギャラリー独自の的方法論は、地域社会との連携において形作られてきた。自ずから、館園実習や合同展での指導の在り方には、本ギャラリーの地域性が反映される。ここでは地域連携について触れておきたい。

5.1. 問題の所在

近年、教育機関や民間企業、政府、地方公共団体等それぞれ異なる立場の団体が連携し、従来には無かった枠組みで新たな事業に取り組むことの重要性が認識されつつある。その理由について、橋本佳延氏は「価値観の多様化とともに、高度に分業化された組織…（中略）…では対処できない複雑な課題が社会に山積するようになり、その解決の手段」となるためであると述べている（橋本2012）。博物館施設においても同様のことが言えよう。

博物館は「資料収集・保存、調査研究、展示、教育普及といった活動を一体的に行う施設であり、実物資料を通じて人々の学習活動を支援する施設」である（文化庁）。各館がそれぞれの目的をもって特定分野の資料を収集し、保存・管理と並行して調査研究を行う。更に展示・公開という形で情報を発信する。多くの場合、自館の資料のみで展示を構成することは稀であり、他館の資料を借用することになる。そのため同業者同士の連携は必要不可欠である。他方、先に触れた通り、博物館の資料は各館の方針に従って収集されたもの

であり、収蔵庫の規模等によっても収集活動は制約を受ける。そのため、博物館で保存・管理されている資料のみでは十分に展示の意図を説明できないことがある。

同様に、現代まで継承されてきた有形・無形の文化財や民俗資料について調査し、公開・活用を行うためには、諸々の文化を継承してきた各地域との繋がりが必要になる。文化都市京都の地域的な文化や資料について取り上げることの多い当ギャラリーにおいては、地域連携が学芸業務の充実に大きく影響する。

本稿では、ギャラリーの今後の指針の一つとして、地域連携によってなし得た過去の展示の事例を振り返っておきたい。

5.2. 過去の事例

博物館施設が取り扱う分野はそれぞれの館によって異なる。当ギャラリーでは歴史、文化、芸術、民俗、産業、自然科学と幅広い分野に目を向け企画・展示を行っている。しかしどのような分野を扱う展示でも、「本学と関わりがある」、もしくは本学のある「京都という地に関連する内容である」ことが求められ、展示の軸となる。以下、この二点に着目しながら過去の事例を紹介する。

5.2.1. 賀茂社に関する展示

京都産業大学は賀茂別雷神社（通称：上賀茂神社、上社）の御祭神である賀茂別雷大神が御降臨した神山の地にキャンパスがある。大学と周辺地域との関係から賀茂社に関する展示をこれまで4回行った。その展示は以下の通りである。第4回企画展「賀茂祭 京の初夏を彩る葵祭」、第7回企画展「賀茂祭—受け継がれる神事—」、第9回企画展「加茂競馬」、そして第10回企画展「上賀茂神社の今昔—そして未来へ—」である。また、大学図書館は賀茂社に関する資料を有している。すなわち、当ギャラリーは地域への情報発信の場となるだけでなく、大学が有する資料を広く公開する場ともなっている。

5.2.2. 大原勝林院に関する展示

第5回企画展「京都大原 勝林院の仏教文化と歴史」は、平成25年の京都産業大学日本文化研究所による調査の結果報告を中心として、開創一千年の節目を迎えた勝林院の仏教文化と歴史とを紹介した展示である。展示から五年が経過した現在も、京都産業大学博物館課程の実習で勝林院の土蔵の清掃などを行っており、同院は本学の教育の場として重要な位置を占めている。

5.2.3. 附属高校生物部に関する展示

第15回企画展「ぼくらのいきものけんきゅう—

京都産業大学附属高等学校生物部—」では、京都産業大学附属高等学校生物部の活動を紹介した。主な研究テーマであるセミ、鴨川水系の水生生物および宇宙アサガオに関する研究成果とともに、生物部の活動を映像等で紹介する内容であった。京都産業大学附属高等学校及び中学校は当ギャラリーがあるむすびわざ館と隣接しているが、中学校・高等学校の取り組みをテーマとした展示を行うのはこの展示が初めての試みであった（図5）。

第15回企画展
ぼくらのいきものけんきゅう
—京都産業大学附属高等学校生物部—

期間 平成30年6月11日(月)～7月28日(土)
月曜日 13:00～17:30
火～土曜日 10:00～17:30
※日曜・祝日は休館
※休館日: 6月24日(日)、7月22日(日)は開館

場所 京都産業大学ギャラリー
京都市下京区中堂寺命婦町1-10
京都産業大学壬生校地むすびわざ館2階

講演会
「生物部2年目の足跡」
講師: 京都産業大学附属高等学校生物部
京都学園中学校・高等学校理科部
日時: 平成30年7月22日(日)
13:30開場 14:00開演
※詳しくは裏面をご覧ください。

主催/京都産業大学ギャラリー 共催/京都産業大学附属高等学校生物部 協力/京都学園中学校・高等学校理科部

図5. 第15回企画展「ぼくらのいきものけんきゅう—京都産業大学附属高等学校生物部—」

5.2.4. 嵯峨大念仏狂言に関する展示

第11回企画展「嵯峨大念仏狂言展」では、嵯峨大念仏狂言の歴史や、民俗芸能を守り伝えていこうとする人々の取り組みについて紹介した。平成28年から30年にかけて、嵯峨狂言堂の保存修復工事が行われた。その完成記念として平成30年度には常設展・ミニ展示として「嵯峨狂言堂 保存修復完成記念展」を開催した。第11回企画展終了後も取材を行い、その後の活動を継続的に情報発信できた事例として重要である。

5.2.5. 弓矢町に関する展示

第13回企画展「弓矢町の武具飾り」は、京都市東山区の弓矢町で八坂神社の神幸祭の前日と当日

に展示される武具飾りを紹介した。この展示では供奉で実際に使われてきた道具類を中心に弓矢町の歴史を紹介するとともに町内の人々の活動を紹介する内容であった。企画展が終了した後も神幸祭の前日、当日で行われる弓矢町での武具飾りの手伝いへ伺うなどの繋がりが続いている（図6）。



図6. 第13回企画展「弓矢町の武具飾り」

5.2.6. 京瓦に関する展示

第3回企画展「京瓦の美」では京都で唯一の京瓦職人である浅田製瓦工場が製作した「京瓦」製品や、「京瓦」の生産に必要な道具類を展示した。資料の中には重さ250kgの鴟尾が含まれていた。制作者が高齢であり、このような大規模な鴟尾の製作は恐らく最後になるであろうということから、制作過程を撮影し、映像資料を作成した。京都の失われつつある伝統産業を後世に残す活動となった。

5.2.7. 六斎念仏に関する展示

第16回企画展「京都の六斎念仏」は、京都市で伝えられてきた六斎念仏について、またそれを継承する人々の取り組みについて紹介する展示である。むすびわざ館が座す中堂寺地区には京都の六斎念仏保存団体の一つ京都中堂寺六齋会がある。企画展関連イベントでは京都中堂寺六齋会に出演していただき、ギャラリー周辺地域との繋がりを

深めることができた。

5.3. 継続的な事業の重要性

博物館を取り巻く物理的な環境、すなわち近隣・周辺地域との連携は、継続的に展示を企画・運営し、質の高い情報発信を続けていく上で欠くことのできない重要な要素である。本学ギャラリーは、大学博物館であることも大きな特色の一つであり、本学と関連する資料や文化財も調査・研究の対象となる。一方で、大学の中心がある神山キャンパスと当ギャラリーのある壬生キャンパスとでは距離的な隔たりが大きく、地域連携という言葉

を、どの範囲で捉えるべきかは難しい問題である。当然のことながら、前節で事例を挙げた諸々の展示は、自館の力のみでは成し得ないものである。地域との信頼関係があってこそ可能となった展示である。すなわち、新たなテーマを見つけ挑戦することも大切であるが、これまで展示で関わった地域との関係を継続させていくことこそが重要である。様々な視点から新しいテーマを見出すことにより継続的に調査成果を蓄積してきた賀茂社関連の展示や、企画展を終えた後も取材を続け、「その後の様子」を伝えた嵯峨大念仏狂言に関する展示は、今後の当ギャラリーの在り方について考える上で一つの指針となり、地域連携の重要性について再確認させるものである。

6. 結びにかえて

ここまで本学学外、いわゆるサテライトキャンパスにある附属施設としてのギャラリーにおける、教育活動への貢献事例について述べてきた。本稿では特に、本学ギャラリーと学芸員課程との連携という点に重点を置いて、教育実践の事例を挙げてきた。

関係する各組織及び関係者の協力により、文化学部が運営する学芸員課程科目「博物館実習」の授業は充実したものとなり、博物館の現場において学芸員が備えるべき基礎知識と技能とを実践的に習得するという、本学学芸員課程が掲げる目標の一つを達成する上で甚だ大きな役割を果たしてきた。

しかしながら、授業日程の問題をはじめ、作業内容、作業環境等、諸々の理由により、ギャラリーと学芸員課程との連携が、充分になされてきたとは言いがたく、多方面において改善が求められる。最後に今後の課題を確認して本稿を終えたい。

問題点の多くは、授業日程や授業内容等、学芸員課程の側に起因する。すなわち、ギャラリーの

所蔵資料を教育資料として活用する一方で、写真資料の蓄積やデータベースの更新等、ギャラリーの事業に寄与し得るだけの調査成果を還元できていない。

具体的な課題としては、履修生による基本技能の習得が挙げられる。例えば、写真撮影においては機材や環境の困難を克服する技術の習得が必須である。実際の調査活動においては、様々な環境下での資料の撮影が求められる。国内国外あるいは室内・屋外を問わず、美術館博物館によって収蔵庫や前室の照明は様々であり、資料を閲覧する台の高さ、斜台の角度、壁面等の背景となる部分の色味など、難易度の差はあるにせよ、同じ環境下で撮影を行うことは基本的にあり得ない。これは本学ギャラリーを活用した授業でのハンドリング実習や調査実習においても同様である。

しかし、限られた授業の中では、基本技能の習得に先立つ機材等の基礎知識の習得や、撮影環境を適切に判断する経験の蓄積さえ容易ではない。現状を克服するためには、座学を中心とする諸々の学芸員課程科目において、実習での実践的な作業内容を見据えた、より積極的な講義内容の構築等も求められよう。

また、大きな枠組みから捉えれば、ギャラリーの学芸業務と博物館実習での作業内容とが、双方の本来の立場や目的を逸脱しない範囲で、密に連携していくことも不可欠である。例年、学芸員と担当教員との間で情報の共有は実施しているものの、大学組織内における役割や立場が根本的に相違しているため、先に報告した小山家資料への関わり方や、合同展の企画運営を例にとっても、双方の隔たりは大きい。

この点を克服していくためには、今一度、ギャラリー及び学芸員課程、双方のこれまでの活動及び課題を総括し、発足当初の理念や基本方針を再確認する必要があるように思われる。一方では、大学博物館の存在意義、大学博物館に所属する学芸員あるいは職員に求められる条件等について、また一方では、今日の博物館行政の潮流、次代の学芸員に求められる専門性や技能等について、更には文化都市京都にある大学に求められる地域連携の在り方などについて、議論を重ねていくことにより、京都産業大学独自の学芸員養成の方法論が確立されていくのではないだろうか。

(執筆担当 - 「1.」、「3.」、「4-1.」、「6.」を吉田卓爾、「2.」、「4-3.」を川上由里絵、「4-2.」を内藤唯、「5.」を川上万尋が担当した。)

謝辞

学芸員課程の授業の充実には本学むすびわざ館ギャラリーの協力が不可欠でした。また本稿の共著者ではありませんが、本学ギャラリー学芸員の浅子里絵氏、平成29年度まで学芸員を務められた木村大輔氏から、学芸員課程への多大なる御指導、御協力を賜りました。むすびわざ館ギャラリーの学芸員及び職員の皆様に、心より御礼を申し上げます。

The authors thank Crimson Interactive Pvt. Ltd. (Ulatus) – www.ulatus.jp for their assistance in manuscript translation and editing.

参考文献

- 橋本佳延 (2012) 連携で広がる博物館の可能性, みんなで楽しむ新しい博物館のころみ. 兵庫県立人と自然の博物館編, 研成社, 東京: pp.77-100
- 河内将芳 (2006) 中世京都の都市と宗教. 思文閣出版, 京都: pp.341-342
- 京都市 (1994) 北区関係文書解説 史料京都の歴史 14 右京区. 平凡社, 京都: pp.55-56
- 文化庁ホームページ, 1. 博物館の概要.
http://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/gaiyo/ (参照 2019.03.08)

Kyoto Sangyo University Gallery Practical Report: Focus on Involvement with the Museum Curator Course

Takuji YOSHIDA¹, Yurie KAWAKAMI²,
Mahiro KAWAKAMI², Yui NAITO²

A gallery has been established in the Musubiwaza-kan Museum located on the Mibu campus of Kyoto Sangyo University, where the curators (*gakugeiin*) affiliated with this organisation engage in surveys and research activities, with a focus on making materials in special exhibitions accessible to the public. Nonetheless, the mission of the gallery is not limited to dissemination to the outside world. As an integral part of university education, the organisation's top priority must be to put its collected wisdom to use for the development of the next generation of museum personnel. Since

the time of the gallery's opening, in collaboration with the Curatorial Course offered by the university's Faculty of Cultural Studies, the gallery has been cooperating with the Museum-based Practical Training classes and accepting off-campus training placements. In addition, it has continuously engaged in developing a suitable learning environment where students aspiring to earn qualifications as curators will be able to gain hands-on experience with a variety of knowledge and skills. This paper presents an overview of the gallery and its activities with specific examples of educational practice in collaboration with the Curatorial Course and reports on the roles that it is called on to play in university education, along with the possible future challenges.

KEYWORDS: University Education, Curatorial Course, museum-based practical training, community partnerships, Koyama family

2019年1月9日受理

1 Faculty of Cultural Studies, Kyoto Sangyo University

2 Gallery, Kyoto Sangyo University

